
守りたかったもの

クノウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守りたかったもの

【Nコード】

N1310A

【作者名】

クノウ

【あらすじ】

最終兵器彼女のちせと猫のストーリー。

そろそろあたしの出番がくる……

「ああまたか、どうしよう……」

シュウちゃんに『待つてろ』って言われたのに。

『どこにも行くな！』って言われたのに……。

でも、行かなくちゃ。“お仕事”だもん。

「ごめんね、あんたたち。“最後”まで見てやれんで。あと少しでシュウちゃんが牛乳をもって来てくれるから、それまで待つてな。そうだ、手紙書かないと……。」

嬉しかった。『好きだ』って言ってくれた。

あたしもシュウちゃんのこと……、まだ好きだな。

でも行くね？

「ごめんね、シュウちゃん。」

……

「ご苦労様でした、ちせ一尉。次の予定は……」

「ごめんなさい……」「え？」

「あたし、一度帰ります。」

「そんな勝手なことは……」 「あたしの体をこんなにしたの

は、勝手じゃないんですか？」

「そ、それは……」 「明日の朝までには戻ります。だから、一

度だけ……一度だけ戻らせて下さい」

「しかし、何か起こってしまったらどうするんですか！」

「……明日の正午までは、大きな戦闘は起こりません。あたしには分かりますから。」

「たとえそうだとしても、今は大事な戦局なんです。しばらくは戻

れなくなると先ほど説明しておいたではありませんか。」

「だから、せめて大切な人にその事を伝えようと思ったんです。時間がなくてなにも言えずに ここに来てしまったから……。一言、挨拶をしておきたかった。 ひとこと言うだけでいいんです。だから行かせて下さい……」

「……うっ……。」「ダメですか？」

「……わかりました、必ず明日の朝には戻るという条件で一時帰宅すると、上の方に連絡しておきます。」

「あ、ありがとうございます!!」

「はあ、また上にどやされるのは私なんだよな」

「あっ！すいません。あと一つ……」

「まだ何か？」

「牛乳を用意してもらえませんか？」

「牛乳？」

………

「はあ…… やっぱりこんなに遅くなっちゃった。 シュウジ…君には、明日の朝早く話そう。」

こんな夜遅くに行ったら迷惑になっちゃうもん。」

一度帰す代わりに作戦会議に参加させられて、帰るのが夜遅くなっちゃった

「でも、牛乳ももらったしあの子達のところに行ってみよう。」

………

「良かったね、おまえら “まだ” 生きてたんだ…。おなか空いたかい？今、牛乳あげるからな。」

そうして持ってきた皿に牛乳を注ぐ

『ピチャピチャピチャッ……』

「……………」

しばらくその光景を無言で見守る

「ごめんね……。あたしはあんた達にこれくらいの事しかしてあげられない。本当は家で飼ってやれたらいいんだけど、今はそんな場合じゃないしあたしには壊すことしかできんから。苦しみから救うには壊すしか……。」

今までもそうだった、なんとか命を救おうと思ってても全然救えなかった。そのときは救えたとしても、

次に会うことはもう無い……

いったい自分は何のために戦ってるんだろう？

何のために自分はこんな体にされたのだろうか？

兵器になるのは、自分でなくてはならなかったのだろうか？

救えない命を目の前にすると、いつもこんな事を考えてしまう

『クシャンッ!』

「はぁ、今夜は冷えるな。あんた達も寒いんか、こんなのしかないけど少しはあったまりな。」

そういつて首に巻いていたマフラーで体を包んでやる

こんな小さな命でも、必死に生きようとしている。

この世に生まれた証を残そうと、生きた証を残そうと懸命に、残された命の限り。

そのとき、街灯に照らされるその場所に何かが舞い降りてきた

「雪？」

まるで、小さな命を天へと導くようなそんな光景だった。

「寒いと思ったら雪か、明日また来てあげるからね。あんた達も頑張ってるな。」

近くにあった板と棒で雪よけを作っていると、返事なのだろうか去り際に猫が『ニャア』と一鳴きした

空が明るくなりはじめてきた

「そろそろ行かなくちゃ。そろそろあたしの出番だ……」

また誰かを殺しに行かなくてはならない

何のため？何で殺さなくちゃいけないのだろうか？

できないのなら、せめて何かを守りたい

そして昨夜の場所にまた降り立った。残りの牛乳を持って

「おはよう。おまえ達また牛乳持ってきてやったぞ、ほら。」

そういつて猫に触れたときだった

「冷たい……」

もはや猫は生きてはいなかった

「頑張ったね。短い間だったけどあんた達は頑張ったよ。苦しまずに逝けたかい？

……あたしにもっと力があつたら、あんたらも守つてやれたのかな。もっと力があれば、みんなを救つてやれるのかな。

シウちゃんを守ることができるかな？だとしたら、あたしはもっと強くなりたいな……」

誰に言うでもない、自分に言い聞かせるようにつぶやく

猫達を近くの木の下に埋める

「はあ……、戦いたいな。戦つてもっと強くなって、みんなを守れるくらい……。」

- 終わり -

（後書き）

全く納得の行かない文になってしまいました。最初はもっと違う盛り上げ方にしようとしたんですが、全然違う方向に進んでしまいました。

100点満点で点をつけるなら、20点くらいです。次はもっといい文章にしたいです。頑張ります。

どうでもいいことですが、シュウジの横で牛乳を飲んでいる猫の位置が微妙に違ってるんですね、白と黒の猫の場所が変わってます。気付いた人いましたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1310a/>

守りたかったもの

2010年10月10日05時32分発行